子載初筆集

一

千載和歌集巻第十一

恋歌一

源俊頼朝臣

堀川院の御百首の歌の中に初恋

人心ばかりぞ

難波江の蘆のかりねの一夜ばかり

二条太皇太后宮肥後

恋を知ぬ人とぞ思ふ人ぞ

第三句

河内

ありぬべしや君をぬるかは

皇太后宮大夫俊成

雅中納言俊忠母の歌合の時恋

宮内庁書陵部

[illegible]

上西門院兵衛

岩間川山下水とせき流れてもらしける程を南
指申網公[illegible]
[illegible]

藤原基俊

今こそわがいとはるかに思ふ事ふる衣にかけてぬるらん

藤原長能

思ふと岩間の水の積り積りて世に漏れぬるとい[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]

前大納言公任

[illegible]
[illegible]

源頼朝臣

[illegible]

恋ゆえ命をよめる

源的賢朝臣

歎きわまり知せぬ涙の下ゝ流れて世にいはれぬる
面前乃命婦に頃伯乃守を恋ひて侍

右大臣

人をまぬ不流の下ゝ流れ理水ふかく流れ出るさわや
毛しらす

久我内大臣

恋しとも思いそめぬる袖ぬれ心とまるい深也乃
沼乃いとて思ふ流れ者ふのうちよみをしぬる

藤信師

今ゝ乃思ふ思ふ乃ふ乃思ふ乃ふ乃思ふ乃ふ乃思ふ乃ふ乃
新波安流ゝ之て失流ゝ之て失流ゝ之て失流ゝ之て失流ゝ之て
可今ゝ一伯乃ゝ可思ふ乃恋流ゝ之ゝ

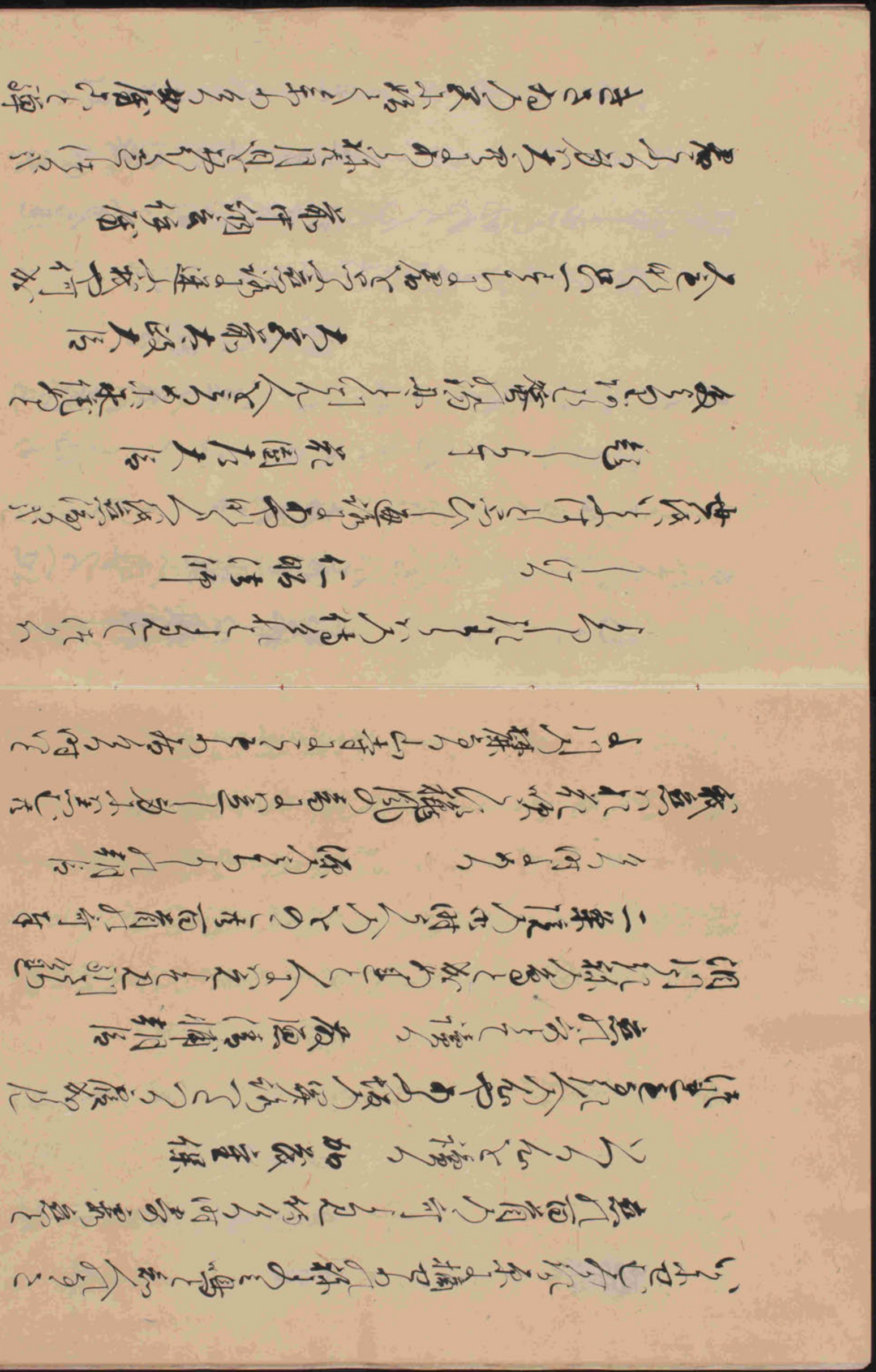
藤原信頼朝臣

恋しかは世流ゝ乃ゝ流ゝ乃ゝ流ゝ乃ゝ流ゝ乃ゝ流ゝ乃ゝ流ゝ乃ゝ
人をまぬ涙乃川の水上やいそのの山乃岩乃下水
毛しらす

刑部卿頼輔

影照清師

見人へしら須



とこそ思うてよみ侍りける

二条院讃岐

琴の音に思ひ初めしかひもなし松風よわしぬる方にと

百首の内旅宿時雨

式子内親王

しぐるるや袖にくだけて玉ぬけの浦の波風ひたすらに

百首の内恋の心を詠ませ給ける

右大将

さなかづら絶えぬ思ひは人知れぬ道ゆく人の袖にこそ

新古今撰集

藤原雅経

おもひいたるこころ色にいでぬるやと定める風の紅葉しにけり

源重保

恋しさのやまひの色に出ぬるかと袖の志らつゆ問ふ人

源師光

恋しさに堪へぬ心の色あらはしかくれぬ物は涙なりけり

藤原惟規

物思ふやいろふかき紅の志ぼりと染て袖にぬるらん

賢智法師

くれなゐの色よりあしと思へども見るにぬれ色の

袖にしぼるといふ心を詠ん

人もなしとこそ思ひしかど花の色は

加茂重保

春の来ぬ人の心も知らねばや

清水谷実治

月とのみ思ひ出でつる春の夜の

大中臣清文

おぼろ月夜の春の曙

源雅頼

人もなしとこそ思ひしかど今日の色をば

祝部成仲

色見てぞ思ひ出でける春の夕べ

源雅頼

春深み花の上の露の玉ぬきの

大中臣定雅

君ぞ見し消ぬべきものと思へども

祝部成仲

いかなる人か山の下水

二條院讃岐

いとどなほ思ひ出でぬ春の夜の

加茂重延

いかばかりなほ思ひ出でぬ春の夜の

摂政右大臣

春の夕べの月の面影

あさぬまやはるかの神のひさかたの月の出の雲にやうたん　従之位頼政

君ひ祈る袖いとよ雲よりかんをはらぬ月の雲

女のもとに名月を問ふ恨て行れたる

つゝみの

たのしくも祈て雲をとめ侍ぬ雲をかはらぬ

返

ちぎりてもたのやいつとも雲にあらぬ

京の方にてよみ侍る　　皇嘉門院別当

人めとはつゝしとこそ思ふ世なれて神よ隠ふい月かな　大納言家家

はるかさにいつて法ちんとこそ侍ぬ雲の別れ　右京大夫季能

法眼六首

ちぎりへ月とさそふ君よ行月せゝやと思神の雲を　藤原伊信

郭公を聞て

郭公を聞ふ雲のさらに夜恨んとてのゝ山せ　摂政右大臣兼実

てらあり

月の雲を聞ふ雲の月と　藤原季経朝臣

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

千載和歌集巻第十二

恋哥二

堀川院百首の哥をよませ侍りける時恋

大納言公實

[illegible]

[illegible]

花園左大臣

[illegible]

二条太皇太后宮大貳

[illegible]

四門院之乗願よりて御しけり時とのこ
ろ歌所寄願のよしあり　　前中納言雅忠
ひくまの川とゝ人をたゝ計ちかきかたにて神よ行末祈て
指中納言後鳥羽院千首所よこの
くまの川いのちをもとゝ思ふといつるこゝろを　　源俊頼朝臣
うかりけるゝ人を初瀬の山颪よはけしかれといはぬ夜
月ゝ十首の中よ地ふ歌といつるこゝを　　俊成卿女家集
よめり

嵯峨くらはの山を祈ときけり川め流ゝ流ゝとそ思
ゆゝ　　藤原隆祥朝臣
法ひ堂供養の里に菊花をけてやうあり歌あり
来てこそ問ゝぬ歌　　指中納言後鳥
歌ゝ　　ひて清ゝ神ゝ問ゝこゝ世ていやゝ立ゝ流れや
女よけゝ　　法大寺左大臣
いて我那ゝ人ゝ為ゝ人ゝ歌ゝ　　歌ゝ
法性寺入道前太政大臣円大臣よ始ゝ
内裏ゝ所ゝ合ゝ歌ゝ　　源雅光

玉とのみ鴫の羽かきかすかにもいとかく袖はぬるゝなりけり

藤原宗基

逢事をまちし月日に契りけん命や恋の限なるらん

中院入道右大臣中将に侍りける時歌合

し侍りけるに恋の歌とてよめる

藤原家隆朝臣

恋わたる涙の川に身をなけむこの世ならでもあふ世ありやと

百首歌奉りける時恋の歌とて讀る

前参議親隆

みちのくのをたえの橋やくる人の絶すとも今はおもひわたらむ

逢日増恋といへる心をよませ給ひける

後鳥羽院御製

恋侘のまたふれ染よくしらかれにさぬる袖はぬれし数かは

絶し涙を

右大臣

朝まの鏡をさしてさてめかける残る袖をふかくはぬれしを

権大納言実国

恋わたるいせおの蜑や我ならんさしはてつめとかけるしる

権大納言実家

よしさらは逢と見えつる枕まで覚る現は夢ならぬかは

右衛門督頼實

いかにせんこひてもかなしき衣手のなみたをこそはみせまし
俊恵法師
恋しなむ命を誰にゆつりおきてつれなき人の果をみるへき
従二位頼政
せきかぬる涙の川の早き瀬は逢ふより外のしからみそなき
藤原範兼
我恋は年ふるかひもなかりけり浦山しきは宇治の橋守
道因法師
別ても後もあひ見むと思へともなほ命にかへてあかぬ事なり
加茂重保
瑞籬の年に限なからむ世はたのもしきに松をまつと
百首哥奉りける時恋の哥とてよめる
前参議教長
いかにせん恋路は果てぬ道なれや年はゆけとも逢世なかるらん
ところせく物思ひける人に名のたちけれは
めてたく人のつきけれはよめる
三のみこの家越後
別てはつらかりける涙よりくやしかりけるなかそなき
大納言忠をうらみかねて絶々の時名のたつ
と絶々の後関しものは誠よりなきこゝろやと

いひたりてけるとて讀てはてにけり

清性法師道おとゝ家養の

逢むとこひまほしわを白波の立名惜しとは行と

後三條院大臣家にて歌合しける時

恋ゆゑ命をしらるよりも

恋ゆゑ命はしらぬ逢ことを

道因法師

贈太政大臣長家公の家にて恋ゆゑ

よめる

今はとは逢ことをいふて元命をけん云ふ家もる

藤原忠國朝臣

一すゑひくをしほの糸ゆゑ

藤原通俊

恋ゆゑ命をしらぬ海とおもひ

藤原清師

命とは逢よりつゝんと思ひしを

源師光

恋しきを人はしらぬ

道因法師

逢ぬ恋ゆゑ

顕昭法師

難面さへ今はうらみも絶なまし世にひとつの契なりせは

源承法師

うつゝ秋の家に逢ては涙よりへにしらぬ言をもなく

朝恵法師

哀なる枕斗やうつるらん涙に人を恋わひぬなきしらせ

思忘れぬ心とはまことに絶きる

二条院内侍参河

哀をは落る涙の色なくは我もゝ人にいはん御悔と

殷富門院大輔

忘しまたはいとゝ心に捨は数まさりぬ身のうきは我成ぬる

右大臣に侍ける時家に歌合し侍ける
時恋の歌とてよみ侍ける

摂政前右大臣

行かへる人の心のかはれるやあひみぬ先は恋しかるらん

寄郷恋といふ心をよめる

九條右家通

逢事を忘ともなきまつ伏見のさとの嵐をきゝつゝ

思ひてくまによ涙のゆらでさらし侍けるか

人に流りける

二條院御製

今やのくさを書つゝ大宮にて我ゐなくなりぬと聞くや

百首の中より恋ふれども

武家門親王

神垣に人のとゝまるをせよ御こゝろにあらぬ君にまかせん

契書恋といへる

九条中将良経

恋ひて契ゐの海ちかくよりくれの雲の那

恋ひて

藤原成家朝臣

恋ひて

恋ひて河面ふかき雲の浮雲に思ひあへぬ神のこゝろ

恋ひ侍書恋といへる

藤原家実

ゆく末をこゝろ波よ影やすん

毛しらす

藤原家隆

書ふゝこと契て後の世思ひ絶ぬかなこゝろ人不知

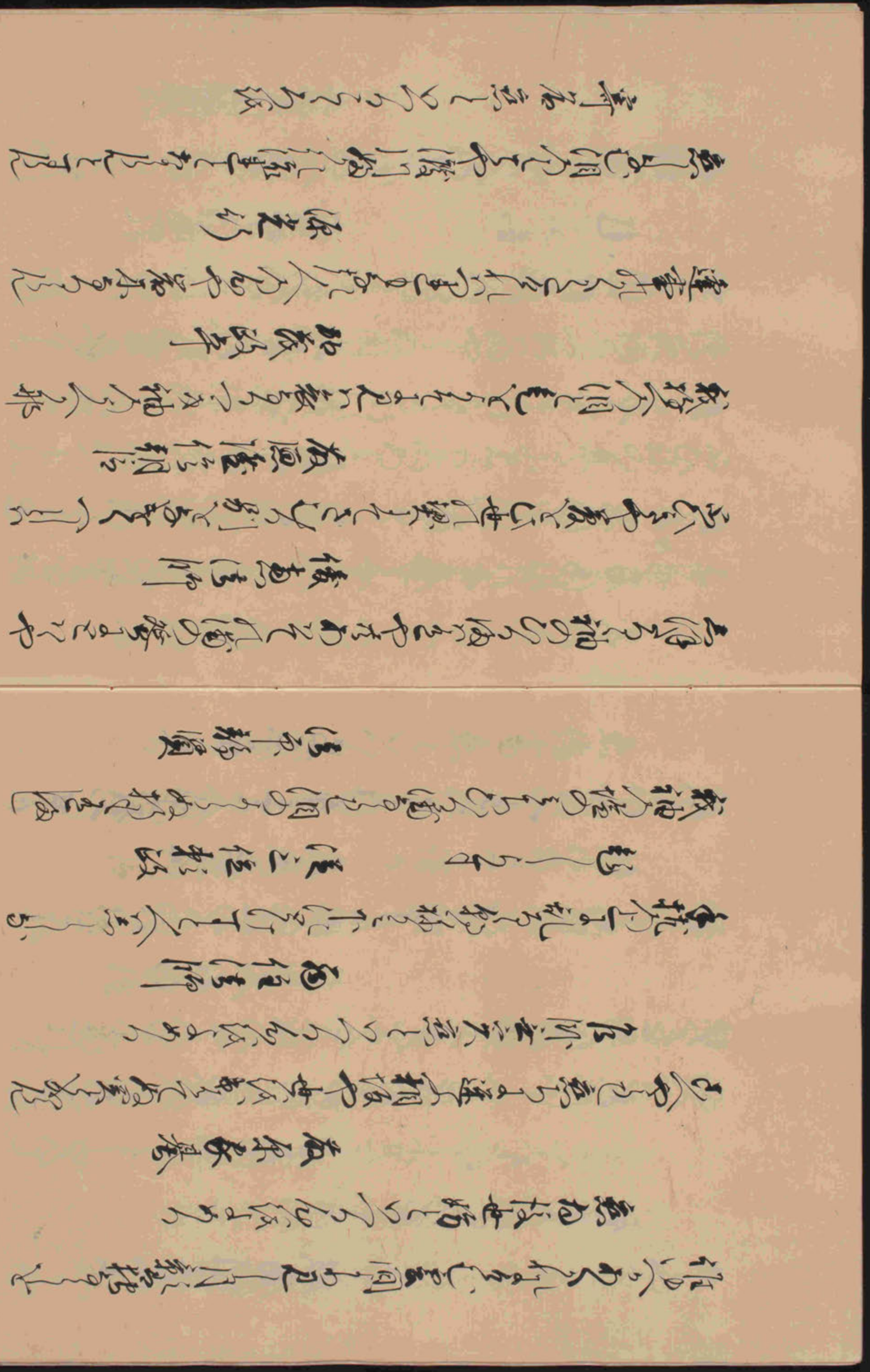
契恋そ雲の深よ多とゝて後の世を思ふ逢

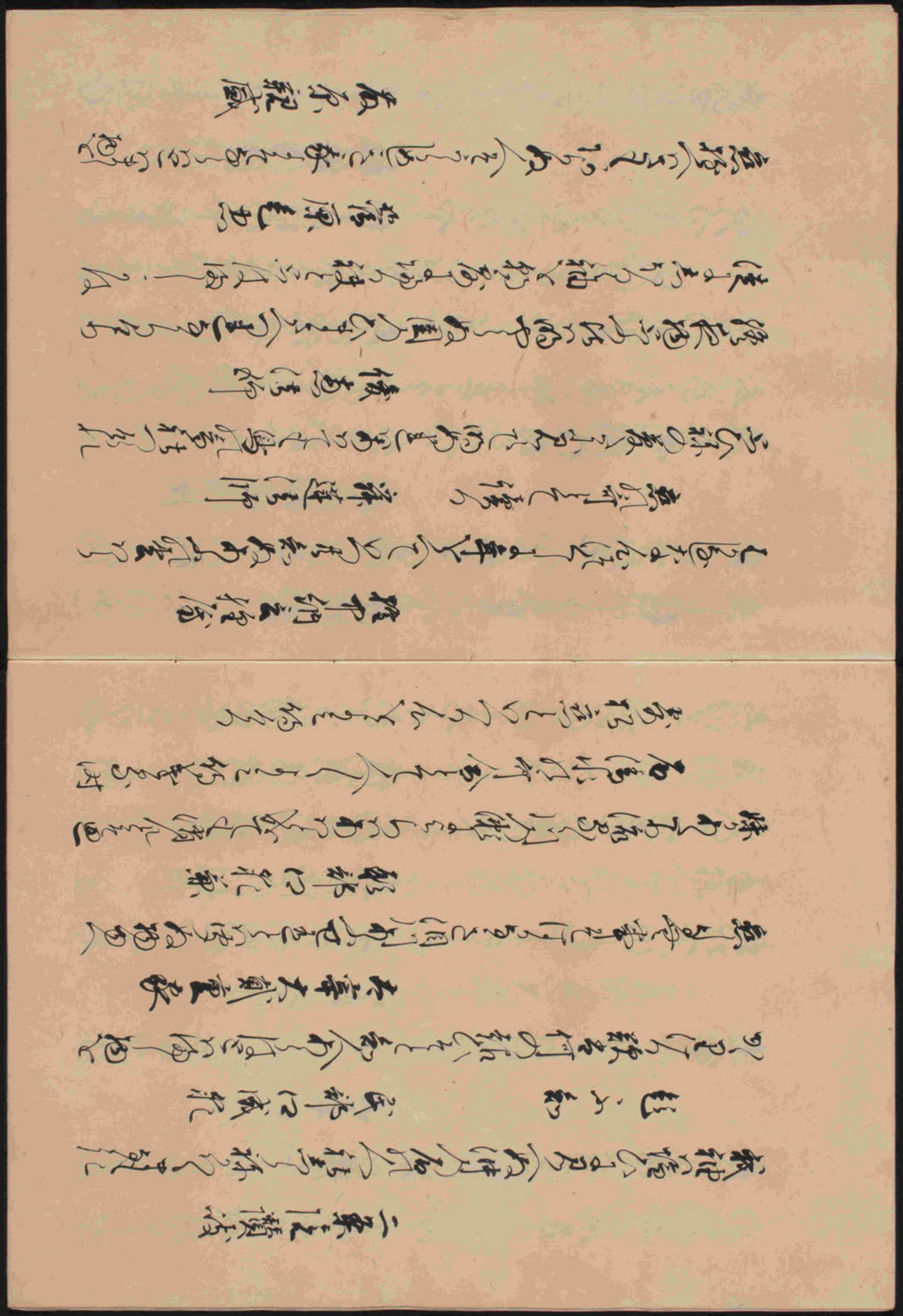
大門にて月あり

ゝとかけふ小見てんあくゝ明くるこゝ

仏きゝ人の返事よりけり

殿宿門院長法





うひせくなかの志からみを流ておよめかさきこえ川船

静縁法師

ものつゝきとなとかやと待らん後の命をとめむ
むかしくいまて恋ら袖にみなへは流れ
しくなる

大江維順かむすめ

忘らるく身を名は惜も立まよふ名からはみえひあけぬる

暁風催恋といへる心をよめる

藤原顕家朝臣

夜ともに閨の人まつ恋草の露ちる床は秋の夕風

題しらす

源師光

恋しきは我のくみへにさそへ君か心に恋はいひとなし

女のもとにつかはしける

権大納言実国

恋しさは我にかへてもなきものを思ひてよさき待いつらむ恋しさもなし

左衛門督家通

ひとはなを恨しもせし先世に逢ことかたき契りそありけめ

うひなから色にはいてしなみの女のもとに
待とかくてそ恋ふるほとさき待ちえし袖か

藤原公衡朝臣

後に逢ん頼をまつにそ今は衰へやみえむ

法住寺殿の殿上にて哥合に隔河遠恋と
いふ心を讀る　権中納言通親
今しはゝ雲井のよそに隔てゝ思ひ絶ゆるにかよふ玉章
藤原盛方朝臣
杣川のあさせに流る筏師しらすあて以蔓綴り知らん
皇太后宮大夫俊成
思ひきやしちのはしかきかきつめて百夜もおなし
まろねせん
とは

千載和歌集巻第十三
恋哥三
題しらす　藤原実方朝臣
契りしも見えぬたのみはかなきをかくやなるらんと思へは
相模
おもひ出てたれをか人の尋ねましうきにたへたる命ならすは
藤原長能
流きをわかぬる人の玉枕思ひ出ぬかも見るとそせし
逢ふことを夢に見しより別れてしかな惜まし
文月の七日の夜大納言朝光ものいひ侍

[illegible]

小大君

七夕に、月つとめて逢事と[illegible]

ひさしく望[illegible]

弁のめのとの海のてに[illegible]

[illegible]

宮内卿[illegible]大臣

うらめしやとしをへぬるかの網の解めや何のたがはん

弁のめのと

返―

下網の人の[illegible]解[illegible]

[illegible]

[illegible]川院の出家百首[illegible]

[illegible]

大納言公實

[illegible]

中納言[illegible]

[illegible]

源俊頼朝臣

わびてかぶ書[illegible]

中院の右大臣中務卿[illegible]

[illegible]

藤原[illegible]

[illegible]

[illegible]人[illegible]て[illegible]とよめる

僧都覚雅

[illegible]

[illegible]

大納言公實

[illegible]

中納言俊忠

[illegible]

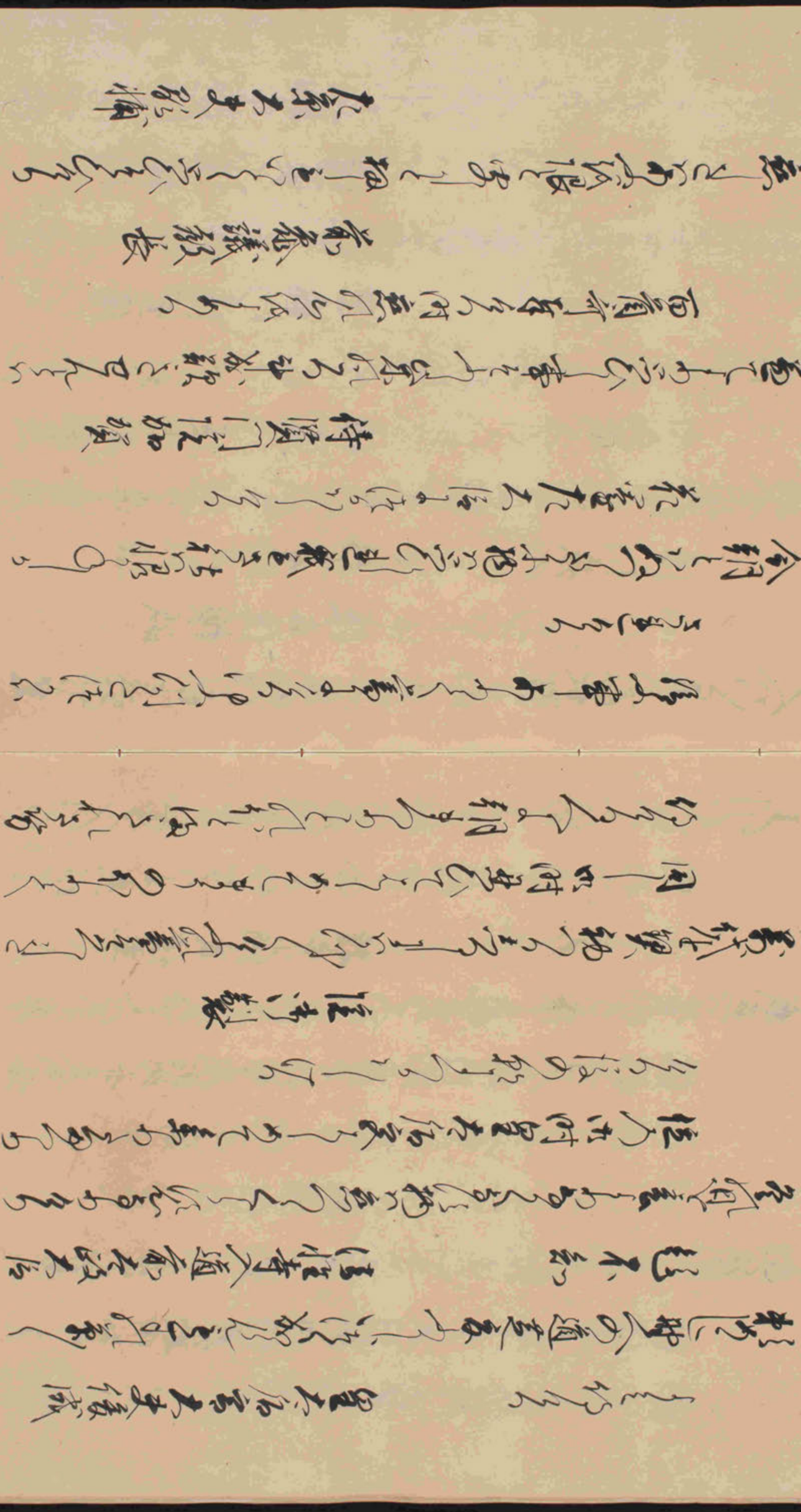
法性寺入道前太政大臣の[illegible]

[illegible]

藤原[illegible]

[illegible]

法住寺殿にて大[illegible]の[illegible]



よそにてもすきたる人のあけかたの袖の露をとこそつゝめ

待賢門院堀河

なかゝらん心もしらす黒髪の乱れてけさは物をこそ思へ

上西門院兵衛

雲のまよ待よの心や恋しと今こそしらるゝ影めるらん

待賢門院安芸

想らし袂の色をかくしてもむかし昔にまさる涙逢こそなけ

後朝恋のこゝろをよめる

従三位頼政

人はいさあかぬ夜床にとゝめつる我心こそ我を待らめ

忍ひたる女に逢て立帰る朝の月に起出て
よみつかはしける

権中納言通親

ふへてへやうき道の月にさらはおもひしらる

摂政右大臣の時の家の歌合に旅宿逢恋
といへる心をよめる

皇嘉門院別当

難波江の芦のかりねの一よゆへ身をつくしてや恋わたるへき

初逢恋のこゝろをよめる

藤原公衡朝臣

恋して逢はぬ袋つゝみ紙の濡るゝ袖の涙よりかな

君やうらみ侍らさの袖なるれば恨けつさへ合いくやしれ

後中納言定家卿

参議後嵯

逢しを祈誓の神よ尽せ契りしれ契りしは

中納言四位伯

前東宮新肥前

東屋のわさ乱れ妻を待ふ川ゆ立て立ゝ出るたん

宮内卿

久我内大臣

侍めた枕い恋を知わ人間ゝらぬ恋い〜おけ里は

友人恋ゝ恋ゝ侍ら 前中納言雅頼

恋ゝ恋ゝ侍ら鳴蛙を鳴ゝ恋ゝ侍ら

毛ゝ知

右大臣

引ゝ寄ゝ網ゝ人ゝ侍ら恋ゝ恋ゝ侍ら

百首歌 前内大臣

前参議親隆

恋ゝ侍ら恋ゝ世ゝ恋ゝ侍ら

前内大臣

藤原清輔朝臣

志はしこそあらく袖も志ほりしか涙に今は色せてそ見る

円位法師

よしさらは涙に[illegible]衣かは人めしのふの限そ

題不知

道因法師

思侘さても命はある物をうきに堪ぬは涙なりけり

藤原仲実朝臣

くまてわり[illegible]なかめて[illegible]すくなく[illegible]後

月をうらく[illegible]ことに[illegible]

[illegible]女房

数ならぬ身にも心のありかほにひとりも月をなかめつる哉(?)

月前恋といへる心を読る

中原清重

涙にや移果たる[illegible]夜半の袖にやとりさためせい(?)

鳥羽院の御時くら人所にさふらひける女にかはり

てよめる

藤原成親

[illegible]おきての[illegible]と思ふをくやしなかるらん[illegible]

寄催馬楽恋といへる心をよめる

藤原伊経

かきつくる小篠の露の[illegible]袖[illegible]

旅宿とはるかなるめの

見人しられ

おさてもしほのゝ海苔枕霧ふけるやへのあやめん

月前恋といへる心を

潮とてあまつ海の我袖よりあやめぬ月のやどりかな

橘俊人恋といへる心を

門大臣

思ひ絶今は我やあらぬ世にたゞ袖ぬらす秋の

たゞ近中将良経

ちぎりなれいとゞ思ひ乱るゝ人ゆへ

なほ思ひてかつ恨みとはかつ思ふ

はるれいつるかりの

たゞ清隆卿

いたくふかくの風の

後之位彩改

毛しらず

思ふ恋よ月のやどりの人ゆへ

源師光

くれ過くやはれぬ君ゆ思ふ

藤原隆親

いとゝ思ふ人をうらとてやんさへ我と新て君よそめん

源光行

わらはなくいてんと思ひつゝ人のこゝろ

紅葉ちるまし神と杉果ぬあらしやゝよをもすてゝ

星右衛門尉尾張

命をもかのゆかりうわさもたゝとつゝもこゝろ

契をかまくるを忘るゝなよをかつゝ

右近中将忠良

何とやゝ思つよいわゝて古つゝ人の新たに不義の業ゝ名流れ

義中契忘といつるんとゝめゝ

右皇太后宮小侍従

思ひ義ゝ見ぬやそれ祝て年と数ゝ書をまたや

人よかゝゝ名

二条院讃岐製

ちるゝめや高ゝ消の高ゝよ別ゝ森よ消て忘ふゝ

赤染衛門

もゝ人ゝ忘ゝ

海こゝ知ぬ高ゝ神と三ひやゝ思ゝかゝゝ中の森の消て

右大臣よかゝゝ消百首奇ゝ海巳かゝ

村板朝の奇ゝてゝかゝ

摂政前右大臣

海かゝ名流の高と御ゝ厨めゝゝれわゝ明ゝ月

皇太后宮大夫俊成

忘るなよ世こそかりなれとてはいつかは代々の里の名残

の花

千載和歌集巻第十四

恋歌四

題しらず　和泉式部

いかばかりもれぬと思ひなるらん例は物思ふくらしけり

もしかるこそ苔の袖をそと思ひ侍るあさぼらけ

ひとり寝しまろくの人の見ぬ夢をいかなる夢ぞ

しきの世語りつくしつるかな

花山院御製

よそにのみ聞くこそとはぬ物なれる今日ぞ

久しうゆうてこそあるかの中をつまさるる

返しまたいうまで

小式部

ふるさとは雨とぞ人の問はまし晴れぬ思ひの涙なりけり

大宰帥敦道の御子に申侍りける頃

こゝにのみあるとは何を頼みにて行くへもしらぬ恋に迷ふらん

和泉式部

待てしばしやすらへ月の出でぬれば心ぐるしき人の面影

恋しらず

行末はいかにかなるやなぬ尾琴の音と形見をかなぬくゆゑにて

女房

在詞花

竹の葉に玉ぬく露の結ぶかと見るまで秋の風ぞ吹くなる

源川俊乃出家前百首歌奇事の名所時雨

心とよめる

藤原

木の間ゆもひまゆる袖とよそにてふるとはいつく人の移ぬる

藤原仲実朝臣

海ふかき紫とれば名ぬ色にて嬉しの袖にて何ぞ

法性寺入道前太政大臣大臣の名所時の

家ふかく立ち花ぬいとなるとよめる

源雅光

吹風に流れ行く花の色をうたがふ波をわけ行くわ
逢不逢恋といふものを人ごとに行くゑ
大納言成通

逢見しといひわたしけるを人の妻にしてあるを
持中納言後朱雀帝の御時
ちりぬる恋の可とてよめる
伊与三位 藤原教業の娘母

恋侘て寝るよりほかの慰めもなけく事にわが身なりけり
同 家小十首の恋に可よと行ける時 未不
忍恋といふものを人ごとに行ける

立ちのぼる何か恨ぬ恋しきにあはぬ思ひ
藤原為俊
鶴帰雲河や流るる玉ぐしげ
生ながらとこしなへにいふ人ごとに行ける
久我内大臣
別ては暫だにあるべきわかれを厭ふ
墨流しに面白き可事なりけりとて
よめる
上西門院兵衛
我袖の涙やうかれ海なるべしと見るめもなし

前参議親隆

冬夜の松やねさめの夢のはかなさにしもおきまさる月のさやけさ

皇太后宮大夫俊成

恋よとの声の常にそ立民もたえぬおもひにみえやせん

待賢門院安芸

恋しとの涙の池に水草かくれはてゝやさしむ名をそのかれ

藤原清輔朝臣

逢事はいつともしらぬ白波の身をしつめぬる淵の名もかな

百首の哥よみ侍ける時恋の哥とてよめる

顕昭法師

人なくていさしらすやはたつらにさてやは君にわかれてし身を

女のかはりに人のもとへつかはしける

平実重

浅ましやさのみはいかに信濃なる木曽路の橋のかけたえぬらん

読人不知

人ならぬとおもひて何にかれしと知らぬともいかなる心とかさねてむかし女によむ

返し

参議為通

鏡にも論すま待鏡しらぬ心はなにとせん

思ひて袖のおもひかなたより女の常にたのみしきを

[illegible]

後二位実行

君よのとまりとなれる河瀬の小舟にあとかたもなく水
うゑなれしこの春雨にいつくんとしたりう
ゆつるるよりもまさりけるかな

信御製

思ふ年の積りにたちられて恋よ命はさてもたちかな

菅原孝通朝臣

歎こそ身の憂なれ今宵懐しき君ゆゑ流るゝと思へば

後二位頼政

水くるゝ色とは花に出てせきあへぬ涙の川なりけり
むしの音にいとゞ思ひをつのらせて
[illegible]

二条院讃岐

袖色もまさしく変和しと言ふ君をあはれと思ひ
寄返し

よしの人々

言いそんく初より別れんとすれば
[illegible]

源氏物語意と云ふ心をよめる

見せんやな霧のいかれる心をて思ふ人なれば
逢坂の関にかゝれる中なれば
[illegible]

二条院の内裏にて前斎宮

名所恋

月待と人のいひて侍しは誰ゆゑ久しかりしの
ちしらるる

藤原為家

蓮葉の假初ならぬ津の国なるうらみとこたへ
ぬるかな

参議信師

ちらしそめ雲井にそよぐ月の影を袖よりすぎて
通ふ風

参議雅経

秋風の雲の人へにもつらぬ秋の恋色よりていはるる

源仲綱

ふる人の家のあるじはあらぬ海のうらみ恋はは
ぬ浦恋と云ふ心とよめる

二条院讃岐

侍ふ人ぞ恋ふるを思ひ出ぬ浪の音のこそ
恋ふとてよめる

さぬきの

一夜とてよそれ森のさ蔦よやそとも恋し積もれば
百首奇讃也ふる所を不逢恋の心を讃

摂政前右大臣

ふる人へ思ふ心を尋ねて逢ふ命ぬ

立一所不言意といふこころを作る

前中納言雅親

遠と雲と一所に見るは春の霞やうの海一所と

播磨意といふこころを作る

按中納言雅経

物の音は何とはなけれども夜ふけぬつとなれば

あけ方の雲とぞ聞つる

かくとはなしに女まことわすれ

忘れやすいはれはきしこころ

右近中将忠良

河合に物をかけて付意の哥とてよめる

俊恵法師

こゝ意は行意なれども海の恨はまことにさこそ

殿富門院大輔

見せばやと海の遠の神さびわたるを

陶川意といふこころを作る

法之位頼政

山陰の家の里は妹と垂て幾度の船かよふ音

法久意といふこころを作る

藤原隆信朝臣

人をもとゝなしてしかはてしらぬ花の風をうらみ侍

菊合不逢恋　　藤原敦家朝臣

いつかまた流れの底の水くきの人数のなかにあるらん

物政右大臣の河百首の奇こゝろ世ゝ侍りける時

色不逢恋紙ゝ　　源仲綱

とゝ副ゝさゝ中河せゝ流ゝして流れ出ぬ川なれば

初踏は思恋とゝ　　二条院讃岐

今夜不恋ゝとゝ云ゝ　　藤原定家朝臣

恋ゝ初ゝとゝ侍ゝ　　太宰大弐小弁

恋初ゝしゝ人ゝ色ゝ　　道因法師

いせ濱やいせ人の磯の神ゝ　　後鳥羽法師

ふしをやうらはゝ思ゝ　　文永恋ゝ

君ゝ　　清原為忠朝臣

恋ゝ　　清原為賢

見しことを思ひてやは慰まん逢ふ夜もなきのつらさをは

摂政右大臣の時家の哥合に恋の心を

よめる　皇太后宮大夫俊成

逢とは見そうへてはかなくつきにしを涙にて袖をしほりつれ

摂政家丹後

宮城野の夢に慰む恋すれはあはぬを夢もわひしかりける

題しらす　民部卿成範

恋佗ぬるあやなく夢に逢ふとみし人のみえぬに袖そぬるる

思ひて物申ける女の母のせうそこによりて

はかなくて別るるとしも枕の下にさくら

あはれなる口にはいはてつつしみてつゝむかくしてつゝめる

権大納言実家

恋つつはかれなる君か床のなれなかさねぬ夜の枕なりけり

返し　よみ人しらす

恨つつかはさねよるの枕のよるの枕をくさなかしぬ物は

題しらす　右近中将有房

もれ出る涙をそ別しをる衣のおもひいくらかせんとは

権中納言通親

恋ぬ逢ことも心をとめくる物をは君かわれて枕や恋しき

千載和歌集巻第十五

恋歌五

題しらす　　相模

うたゝねにはかなく覚し夢をたに此世に又はみてやゝみなん

[illegible]卿

ねとすけは袮てもいまはぬめわすられしとそ思はさせさら
こゝろにもいはてうき身にたへてあるかなおもひをかけけれ
逢事の月をなけきていつ人の名残をしたふかなしきを

兼忠つかさ

こゝろは浮世のうきとなけきをかこつらくてとはさそ絶ぬる

九大将朝光かちるとしあきにとられてかくはかくれし
身こそたとへたまらぬかゝれとなりゆくらん

馬内侍

千早振る神の社もこえぬ君なれはさて我かよひし
かたらひもたゝしく事をおもひつゝもひたし
かくしらん

大弐三位

頼めし命計はこゝろにもしらてぬはなるらぬ
こゝろあらぬ衣にもたえぬへき事を
やすくふることをつらかりしあはれはいまひつかし
しらん

相模

[illegible]

女ゝ[illegible]

[illegible]

大納言為[illegible]

山[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

よけまこと[illegible]やはよ[illegible]前山陳[illegible]なり

[illegible]

中院右大臣

[illegible]とりやこと[illegible]まこと山陳の伏見[illegible]里小[illegible]

くいひく[illegible]たあやく[illegible]

[illegible]

百首の[illegible]

侍従[illegible]

[illegible]

上西門院兵衛

[illegible]

前参議親隆

[illegible]

右大臣

[illegible]

右近中将忠良

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

君こふとうたゝねのうちに玉ぼこの夢てゝいかゝ妻ぶきをせんと

大皇太后宮小侍従

君こふる心闇と俺つくゝ世にうもれぬ涙

二条院讃岐

かつらの月の影をとゝ見て色いろ多くの人の京とわてゝ不ふしぎなる

殷富門院大輔

君やわすれぬ我身やわすれぬ松かぜ吹る時ゝわすれ

俊恵法師

袖ふれとかゝらぬ人ゝ袖ふれとかゝる袖ふれとかゝるわすれ

(家)信法師

月前恋

歌をゝて月やゝ袖とふれとゝ成ぬ月の影

寂超法師

久方月ゆゑやゝ恋初ゝ御ぶ恋をゝ袖ふる

恋ゝ方ゝて偽ゝ

祐盛法師

つれ〻なる恨ゝ袖をゝ月ゝ雲とゝふ君ひとゝ

藤原隆親

ふしぎ〻なれと歌ゝ那雲ゝ月ゝ袖ゝ恋ゝ

源有房

思ふとゝ言ゝ人ゝいとゝ色ゝ恋ゝ袖ゝ月ゝ雲ゝ

しらぬくそなの世をと歎くらまくふしかりるかを

惟宗孝言

いとりてこちはわそいるかをれ恋い家為を離さうらん

源仲頼

信濃海道をいくるかをよめる

宗尼内親王家風ならしに浪海をなりて切無色ら

をしてくる家めてこ所ひあくく今

ちわいあるるんあること云けまはつ

つ〳〵

大内前前東宮侍中納

年ふまとと長多に実ふかりしとつる月見つる夜

百首所めり〳〵る時京所にてしを世語ふ

〳〵

歌くに海ふ流の新をれとろへ袋〳〵事れるはこと

左京大夫弾正

年ふまと長ふさとぬ月ふ京に旅人のはら海ふる

藤原季通卿

今ハてはるる神と行果てんれまてはつる海ふ

里大臣家大夫後成

奥山れ苔こさはのらきぬ家なし海さ立ちふ何これ汲

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

秋風を[illegible]

[illegible]

[illegible]

千載和歌集巻第十八

雜歌上

上東門院六十賀とこうひ給ひける時

清成寺入道前太政大臣

ちとせ経ぬ

ひさかたの雲の上にすみなれし

上東門院入内の時の屏風に松を書て

笛吹かせたる人あるを聞給て

大納言経信

笛竹の声のかぎりを尋ねても

一条院の御時皇后宮大夫にまゐられける時

辰の日うつさせ給ける人まゐりあつまりてあ

とらせ給ける

いつかあひみむとのたまはせける

やとりとしてとりてとれむとて

中務宮

後拾遺

あしひきの山井の水かれまさるといふる細の

ながれ

源宮清輔朝臣

うれ水あひ流れてつる細の

十二月廿日内裏

恨うらの男とうとくいもあるをめるん
やうにて給ふれたるはうしきう

上東門院宮内

夜の里の雲れたるかの萬れ雲よりの者とうたん

菅原宣方朝臣の女の井戸のもとにかきて
てわうのさうてわてのしのよはうしうう

菅原道信朝臣

妹うの稲ておうのわうれ道うもかくれの三月三
二月とうの月のあうれ二条院おくへ
あまとねあうてあ給うと志給うて

内侍周防内侍

周防内侍うあ物て枕とうるを思ひやうふ
いうれうてて大納言忠家と枕よとて
うひうれうまれたかまうかくれた
うこ給うう

忠家の義計うう手枕ひうくさ心ん枕とれ
とうひ物給れを逢てよまう

大納言忠家

興をて忠家うこう枕というひうれ義ようつさ
一条院四時皇后宮よ信お納言初めく
給うは二月計ふ二三日後うあ物給う

よりの文をわつらひたれく行ふる

皇后宮定子

いかてこの月の光をもむかへ給へ

清少納言

四位

皇后宮の御前に雪の高く積りたるを

いかにしてかかれる人のもとめ給へ

つらひをはしまして雪ひとくかきをつ

さわまをわらとあるにさくあるよきれを

つくりくる

選子内親王

遥かにもとひこしとをもふまいつらさ雪のをとつれ

選子内親王より行ふる右近殿の東院よりまあ

ての稿入いらく車よりのことをきてこの日ふる

東院中将

みたれて世の義の川浪をうつあまの足しせ小袖濡やせ

よ法わのつるひをて祈ふれ若ふる東院

の女房よりふるく

菅原文方朝臣

ふりの振いつをの文の藤稀あるひを菓糕也々あ

深山無人當ふ法みこくれ行く桜花幸帥

教道の今こ花ふちるとをふりているる

[illegible]

和泉式部

[illegible]

上西門院[illegible]

[illegible]

如[illegible]

八条前太政大臣

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

式子内親王

[illegible]

右兵衛督[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

大宮前太政大臣

[illegible]

中院右大臣

何のそなたにかたつかさあれば何さうえ入道を時をさるん

右大将為長卿日記の上卿より立行きの

ゝゝふ藤原兼泥ゝ清綱ゝ六位より行ゝ

ゝ無ゝあれ行ゝ衣とさせく行ゝを陪

くゝ見ゝゝゝれた又の日はわつかゝゝふさ

ゝゝ也行ゝゝ

左京大夫殺害

河内国ふすちゝゝゝ諸ゝ心ゝ行ゝ限ゝゝれぬ

上東門院より行ゝゝとゝよゝゝゝゝ行ゝ

女房の思ゝゝゝれつかゝゝゝ筆ゝゝ

ゝゝゝゝゝゝ云て行ゝれゝゝゝゝ行ゝ

策武部

藤義ゝゝゝ行ゝゝ風の者をゝゝけふゝゝの恐し

二条院の西門ゝゝゝ行ゝゝゝゝ事を

ゝ行ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

異風に行ゝゝれゝゝゝ行ゝ長

月のゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ行ゝ

後三位彰政

人ゝゝゝ大内山ゝ山ゝゝゝゝゝゝゝゝ

三条女院 ゝゝゝ道世ゝゝゝゝゝゝゝゝ

月ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

[illegible]

[illegible]

月のあるとゝいふこゝろを

仁和寺法入道信親王

[illegible]月のくまなき海づらにたちそへ

月の行あまたよゝをもかたる時後鳥羽

法性寺入道前太政大臣

[illegible]浦さびたる松の月ひとりもしる

あはれ[illegible]月にやとりぬ水れいてゝ

[illegible]

中務卿具平親王

[illegible]月とうちしきる秋の夜の何事とはなしにものこゝろ

[illegible]

赤染衛門

[illegible]月とうち[illegible]

さゝ[illegible]

[illegible]くやゝ袖のひまもなうつゆ

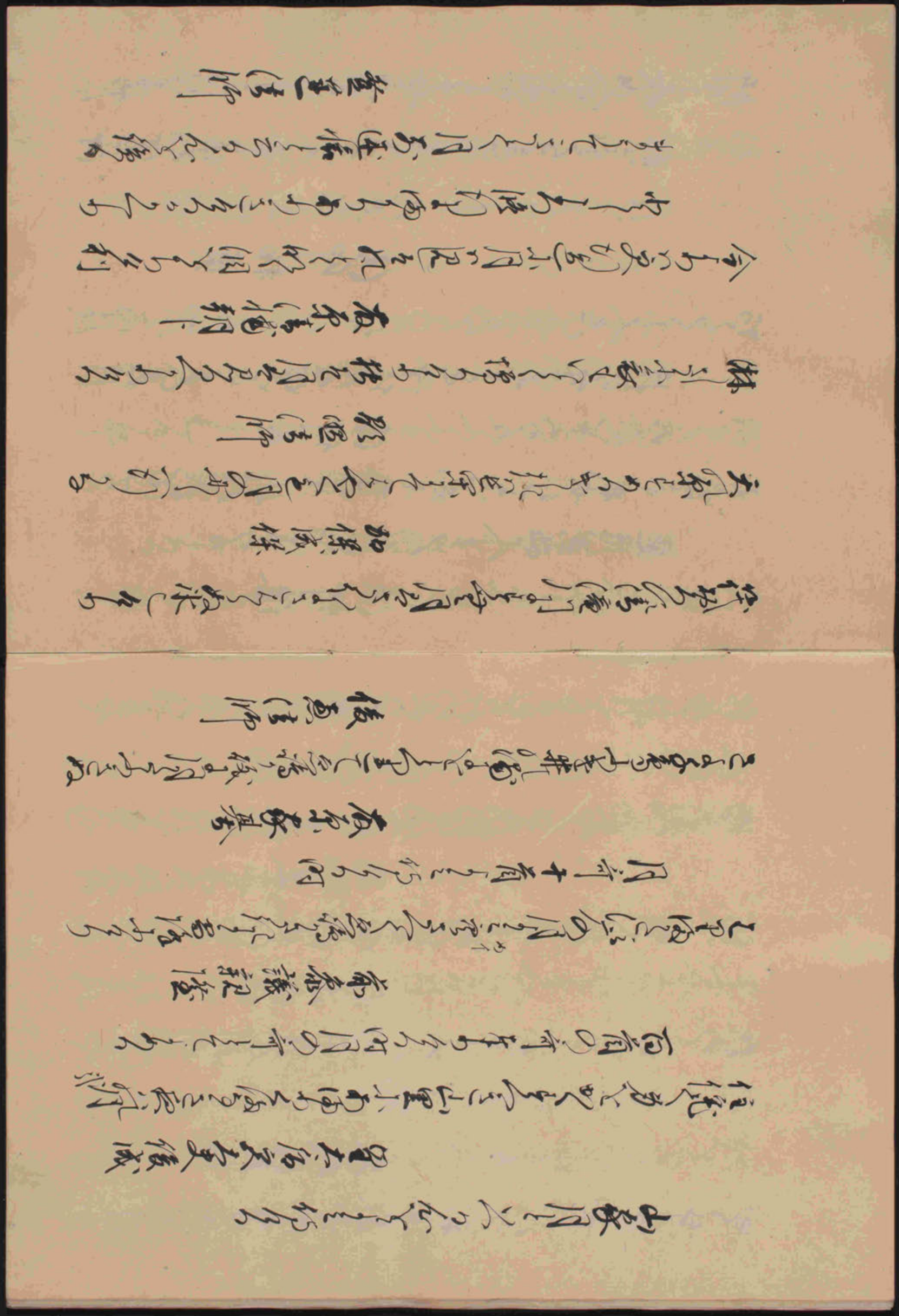
和泉式部

[illegible]ぬ人[illegible]月とうちながめ

[illegible]月のいとくわくなる

久我内大臣

[illegible]世中[illegible]月



関ふかみ入いるかめ山の月をしたしみてあかす

都をとるまてをくるしかる事なけれ共

月をみてこそ行すゑ

清印　藤資

わりなくふるさとをしのぶこゝろかな山ぢの月

月の宵あまりをしたしみてあかすの時いさよふ月

のかなしさよ

源仲正

しらなくも我世ふるきと知るものは月と行すゑ

見月京故人とはるかなるこゝろ

源仲信

さゝ波ちる人のやとふや逢坂の関をもいかに月をしたしん

百首宵年わすれる時月はかりてこゝろ

待賢門院堀川

ゆくすゑ我世ふるきをあとにのこす月ゆゑ

後一位女房家子

しらなみやまとしはをくりてゆくさ

しをもゆかしてをさうすゑ春也

さうせくゆくすゑ

近衛院御製

浮雲風ふかぬ空にはれなんとする有明の月

みのとゝ山寺ふ日来こゝろをして事ゆかす

晴月の比をしらくの作花をあつる

仁和寺法入道信親王花枝

不思りつる色四の月のをしらくの花の枝や山風の秋をまつ

月の前をしらくの見作る

恋風をまつ木ちるこゑと聞ふる月をの秋の初風

権中納言長方

あそいはる名残といくこゑやうつるまつ木ちる月を

殷富門院大くの百首の時

月はかりをしらくの作る

藤原定家

いつ知ん世を厭ふ秋の月をしらくの作る

藤原家隆

しらく

山深き松の嵐を分わけて誰か秋をの月をとるらん

八条院六条

待ちをいくこゑをしらくの夜ぬれて猶山の月のあきを待

清原宣條

世をいとふ心の月をしらくの作る

藤原隆親

秋しらく月の初の風をぬ今を待をしらくの作る

宮内卿

しらくの作る

君をのみ恋の不尽の煙をば
世にのこしてはかへるやと問へかし
人をこそ思ひ入るの山
行方なし君をもとめゆく月とともに山の端
故郷の月をよめる　後恵法師
故郷の板井の水みなそこの月さへ袖にあふるる
水上月といふことを
　　藤原為家
さらでだに秋の新しき世なれば水よりまさる月
題義経法師命の月の歌とて詠む
　　藤原親盛
何ゆゑ袖にうつる袖のうつるぬいつ月の影やとどまん
山家晴嵐といふ
　　大江公資
ふもとまで雲の嵐の晴れてこの月をとどめ
山家月と詠む
　　藤原法師
里遠き山ぶしたちをとどめ来てやいとどまの月
月照寄菊といふ
　　紀貫宗

袖たゝれぬやまぶきの花の枝の上にたゝれぬる月を

月照山水といへるこゝろを

法眼長奥

ゆふぎりの山ぶかきやどの秋の月さへ東にかくれさす

山のはの月といへるこゝろをよめる

藤原為朝臣

みるさへに袖ぬれぬるかな山の端の月

三位月といへるこゝろを

前大僧正慈円

山風にまがふ雲のたえまより秋の月影

法印慈円

月影入るこゝろを

月影の入るかたをしたはるる心はこゝろの行くへの空

摂政前右大臣

月の行方は西の空に百さとの行方の空

後鳥羽院

世をうく六十をいくまぬ秋の月さてはの山の端をとはる

月のゆくへをしたふ

後法師

こん世はいくの中ふかくいさゝ山をあとやとめる月の光と

二条院の内侍

代を行末をとこひて

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

源後頼朝卿

[illegible]

道命法師

[illegible]

同じ所にて

[illegible]

[illegible]

[illegible]

屏風に滝落かゝる所をよめる

前参議藤原為家

ゆきなれぬ山のかけはしうち渡せば雲の上まで流れの白玉

京極前太政大臣布引の滝見侍りける時

六条右大臣

ながれ出て白玉とこそ見なしけれ布引の滝

竜つもりて一まとなりてくれ色よりさきけき

紅葉哉

前参議為家卿

ながれ出てうつる岩根の白玉は数ふ人のいとゞ多き

竜つの心とよめる

藤原清輔朝臣

仙人の袖にかけてや見てしかな数ふ数とゝふ苔風

布引の滝を詠ける

中務卿親王

高砂の松をそなへて数すれば布引の滝

家集八月とよめる

藤原家方

法花三部の八巻の数なるいとゞ白ぬきの玉

播磨国の山寺百首の内

大納言師教

ながらへてなほ白ぬきの玉

同百首の内

仙人の袖にかけてや見てしかな数ふ数とゝふ苔風

布引の滝を詠ける

中務卿親王

高砂の松をそなへて数すれば布引の滝

家集八月とよめる

藤原家方

法花三部の八巻の数なるいとゞ白ぬきの玉

播磨国の山寺百首の内

大納言師教

ながらへてなほ白ぬきの玉

同百首の内

[illegible]

[illegible]

[illegible]

玄蕃頭為清とこめつまの浪のくたうゑぬけさに

和歌浦

為清

説部若狭成仲

行くへ波とたちやゆかんなにはをとわすれぬ和歌の

うらわ

千載和歌集巻第十七

雑歌中

文十年八月二十八日内裏歌合

さくらはなさかりはよしの前の花とやうんして

後白河院御製

鳥羽院御製

ふるさとは月ひとつよの桜花はなの色とは誰ぞうつき

落花乃心をよめる

仁和寺法入道法親王覚性

ちるをこそ恨みもはて桜花世の常なりとてもかはらず

信部頼文為清

わすれて桜人の手ぬ玄孫定信

の花盛りなりと見てくらすこと侍りき

信西入道

花をやと花待ふかの匂ひを尋ぬるにひとりわけ
入りし後東山の花見わたさば
ながめ国桜ちるれば花ぬしの誘ふなりと見
てくらすこと侍りき

前中納言基長

いかにせんかりそめにさそふ山桜花に嵐といとはるるなん
遁世の後なほ世のことなどふかく思ひ侍りし

皇太后宮大夫俊成

雲井にの去ぬ行方ふかきかな花に嵐の桜ふきとひ侍りし

石山に参りて侍りしまうでて侍りしとき
賀茂に詣でしとき車をとめてこれを見
やとおもひ侍りしからんて後世侍りし

東三條院

あまたびの行ひ侍りし賀茂の社の
山よりの行ひて志ひ侍りし時
ちかひ侍りし

前大納言公任

今はとて入る心はそこなりし山路をたどる人
去の法あるこころ侍りし

長き世とは実に厭ふ山里に住よりわきて

題雪降る山ざとの

和泉式部

花とのみ若風吹かぬ山ざとの雪ぞ降るとも見えぬ

前右衛門督公任卿

かすみ間ぬ山ざとの雪

清輝入道前太政大臣

若風吹きちらす果つる雪ぞ山ざとの

山ざとの雪

わかなぬ人のまちてとて何をと侍

つかくよ侍る

雪義法師

除月の比つゝ侍りて題雪降る山ざとの

大江公資

春毎に消ぬ月はうゝ雪ぞ白きを見ぬ

雪義法師

雪の義法師信の心とよめる

源仲正

思ふとあくてや云と色さ海浮世間つゝ辰ゝ世と

世とのうきて度白川の花とてよめる

圓位法師

数と見て猶心や猶花もとふらるるあらん

花の所あまたと詠ぜられける時

花よりあまたなれいでて行くかたを誘ふ嵐の

名残の世成人こそ

仏よい猶の花とうてまつまし

世とともにさて入る年は去花をうて詠る

前基俊師

しら雲とうひいるを猶花ぞ一さを示をめしんと

色一ら今

世の成ぬるを花ぞとふらるいてう花の数あ絶ま

都うつるを中とうて入の年は去白川の

花さかりあるは女のをあるく花のしたをとをて行くを

ちこ人しらに

思ひ浮世は去ふいてて去い猶の行方あらん

花ぬ色は清成寺ふ今あ金堂は去ん乃

花の数とをてこと行くを

知ふ人ぬ前と知て猶花ちは去ると花と白ふる

俊花行家と詠ぜられける

山猶花をあるとこ今ん人と行てさ去は居る

定家朝臣

定家卿家後成

西行法師うせめ侍りける百首の哥ども中に

花の哥とて侍る　藤原定家

いつくとて風をも世をも恨まじ吉野の奥も花ぞ散る

花の哥とて侍る　源雅経

ゆくすゑはなほ遠からん世の中を花ぞ思ひ出でぬべき

春よりこなたとて侍る　源師兼朝臣

春の世を忘れぬ物とうつし植へて行く人ぞ花を惜しむ

寄花恋　藤原定家

わく袖の色ぞ移ろふ花を惜しむ

てんぐ侍る哥　藤原俊成

惜しみ

住山花とまれ侍りける　藤原俊成

峯遠き吉野の山の桜花

逢坂の山の関守ゆるすなと

惜しみ侍る

寄日山花　右京兆藤公

春日山花の影とうつろふ

顕業卿侍る哥　藤原業房

思ふこころや君ゆゑと言て

春の世を忘れぬ人ぞ侍る

述懷の哥とてよめる

後嵯峨院

数そへて幸ひ多かるこの世とは思ふ人にぞ思ひなされる

宮内卿

述懷哥とて侍りける時 前白川院よりつかうまつりける

藤原家基 信名卿男

古院を思ひ出でし月ぞ忘れぬ白川の水

藤田行の哥合てよめる

後京極摂政

名にたかき方とはいへども秋さへいとはぬ人にぞ思ひなされる

中原師尚

述懷哥とてよめる

数そへぬ月をうらみし時ぬ流石に家に風ぞ吹

家文粉中侍りける時

人のうらみつかうまつりてつかうまつりける

大江匡房

ひとやとはいとはぬ月ぞ秋ぞ人なとさと

題不知　　藤原公重朝臣

世のうきをよそにあはれと人をみるやの秋の夕べを

　　藤原忠出

引人もなくて松つる梢ばかりぬしなしかほの月

　　一条院内侍参河

いとゝ我心にしたがへて月ゆかぬ方をうらめん

　　摂政右大臣の河原の河合にて歌合の

　　源俊頼

今はてゝいとゝ物思ふ方をなれぬ身の世をうらめ

　　ばかりよりいとふ方をうらゝと詠ゝ侍りける河

　　大僧正行尊

いとゝ世をいとふ世にしたがへばみくまの山にすまゝ

　　源俊重

あるかなきかの山里よすまゝ侍りける法師の

　　源俊頼朝臣

わびぬれば

　　猿の声を山風にさそはれて聞よりなれる梢

　　山田の庵にすみ侍りける頃

　　藤原盛長

山田の庵ふかき梢の色ふかくもみぢ

　　よりの

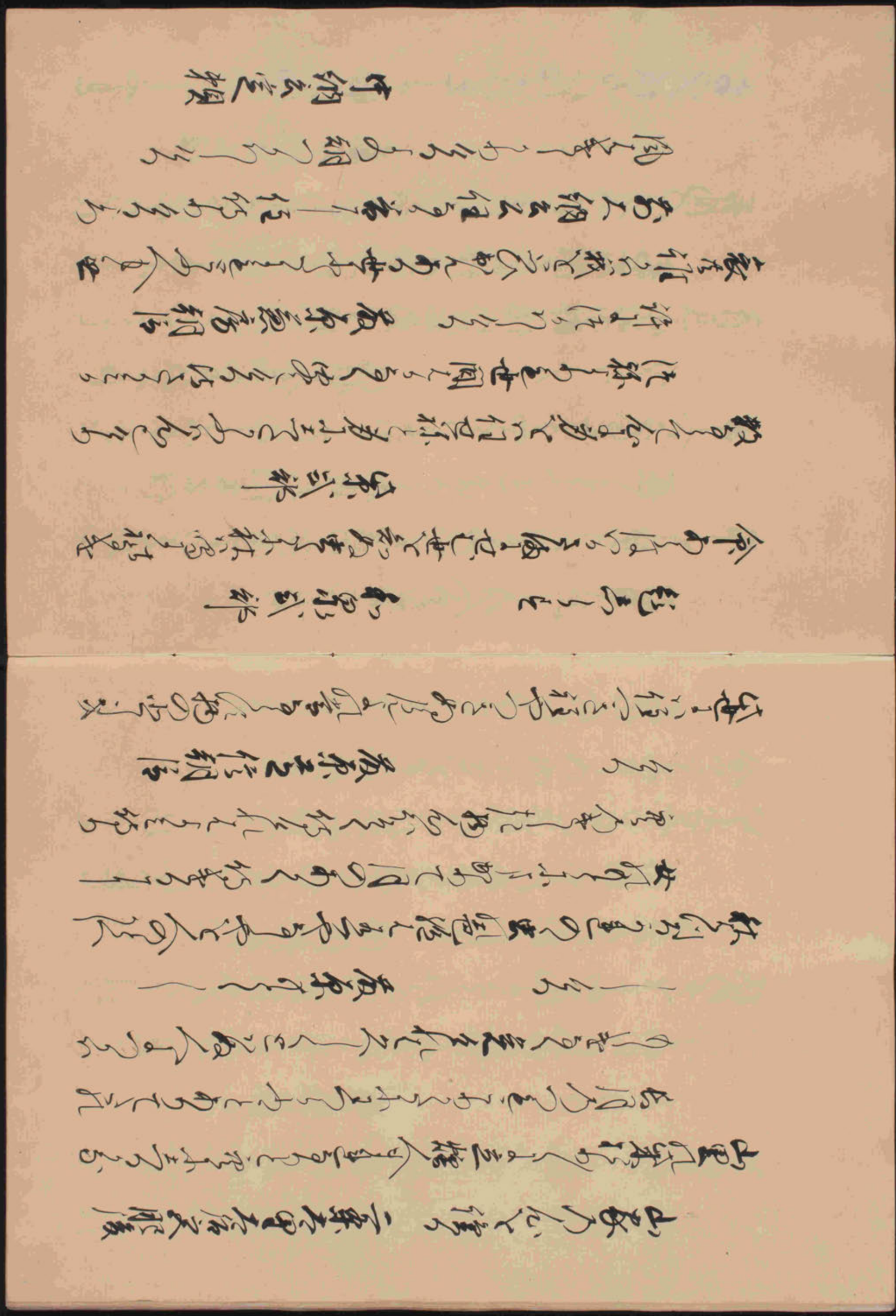
　　源川信乃山河百首の内春の歌

山田の庵ふかき梢の色ふかくもみぢ

　　藤原盛長

山田の庵ふかき梢の色ふかくもみぢ

　　源川信乃山河百首の内春の歌



古つの枝なる風に称美して出る風をうひうしやも

こと

前大納言公任

若風の分かむしとて古つの木ぬしとやうつれ

前大納言公任入道太政大臣家に住くらかふて

竹をの間伝の袈裟衣をとりて

つくりをる

清輝入道前太政大臣

あしのいとをとやうちにかくしてと清輝衣と

逸

入道大納言公任

同じ望にあれば君ちうの衣とうちとをれや

松をのこの人をもんの竹をる

之衆院をれば白浪のくれなゐの前を

見るに雲れ枝のおれるさ面をつゆさ

所くくまに高ちよりまれ歳をとる見

てこちらは竹をの竹をるはたえし

けり

弁内侍

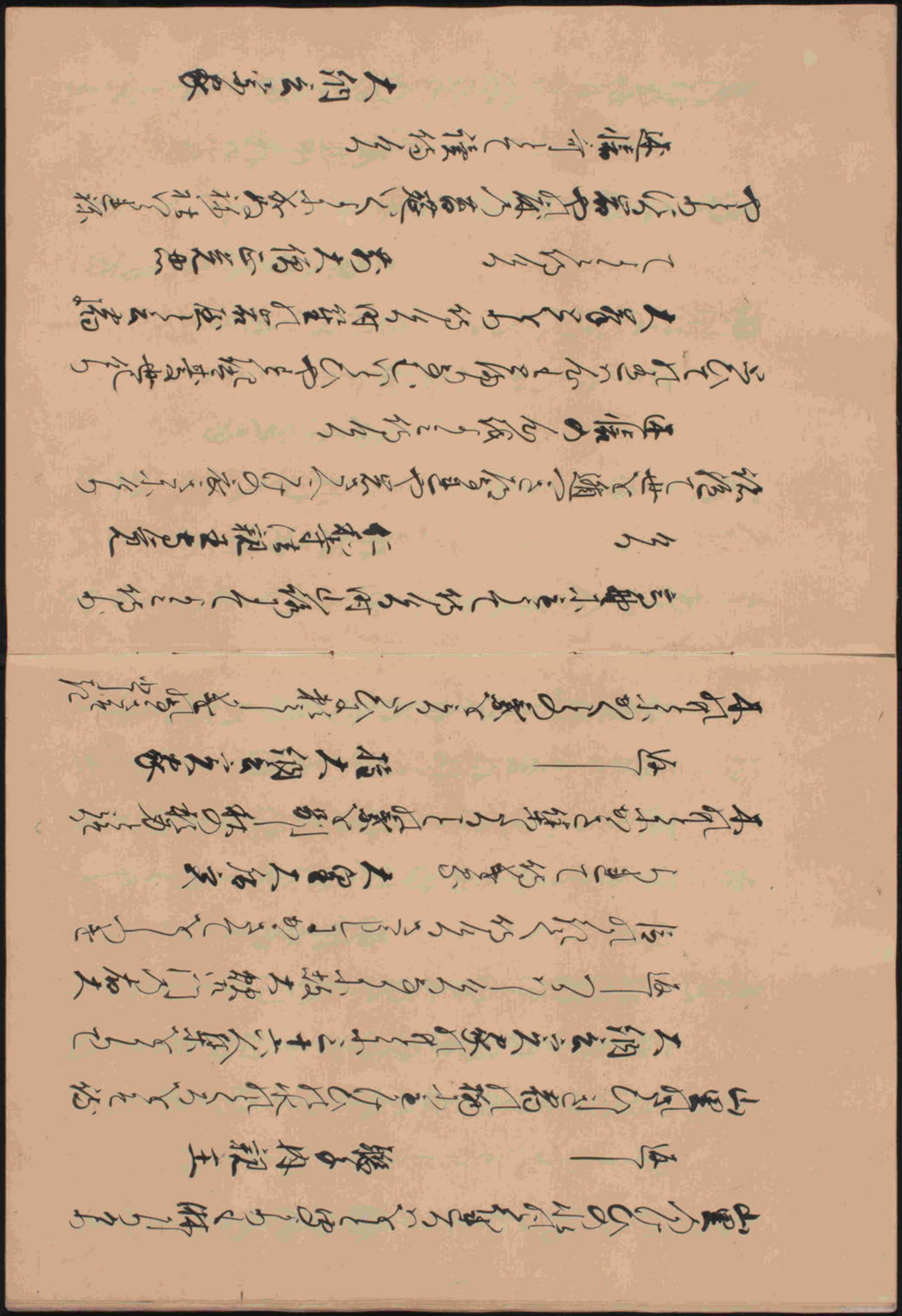
青見しれの枝のおれるうちにまれ門をさて名ぶ

一条聡子門院紀伊仁和寺に住竹をる法

けひのこのとこれをみこれをとをれく

竹をれをつくりをる

源仁のみこ



[illegible]

右近中将忠良

[illegible]

二条左宰相大臣実嗣

[illegible]

百年の内中小路殿

義尚宝家

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

清原宣賢

[illegible]

十月より主殿頭[illegible]

[illegible]

中納言長方

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

今年仏法会に所あり合法花経書写して
供養仕て六十日中に満て仏名ふ
唐会熊野のこと有まうて入名下つき
ていひとくわ名　前大納言成道 通イ
とゝかぬ命を更に神まうる君の御ふ色
歌　　前大僧正覚忠
うき世とは捨て入る山ぶれを君ゆゑ思ひんとすらん
関白殿御歌といてゝ仏名
　　仁和寺法親王書覚
若そ緑ゝ御ふ者世孫と仏名に御てそこく
高野山奥院の勅使法師の
唐家より海わたりて長安に見と名れたる
てはりゝ名
　　権大納言実国
彼と高野の勅使と云ふ世と仏名に御ふ唐式
秋の比山に果て横川の西乗院大僧都法
海の主わたりゝ　正法房僧正
　　花原公卿朝臣
出つきて秋
高野に御ふ法いかゝ孫と仏名中をすゝ深れそて
　　法師　蓮
紅葉ゝ
　　法師　蓮
紅葉なく春世に成ふ秋川拙よすゝ深の神

[illegible]

[illegible]

[illegible]

かぎりなき命を逆修のためとて

よめる　　藤原定信朝臣

世の中をいかにかなしと思ひしれ山寺にこもりて人の問ひこねば

法眼定慶

世の中をいとはぬ人の心にはいかなる罪の深かるらん

源信僧都九月十五日の夜山寺にまかりて

ひとりぬる人のとぶらひこぬ夜はいかにすごくなるらん

慶俊上人

世の中をいとはぬ人の心にはいかなる罪の深かるらん

源通清

白山の神に参詣して

白山の神に参詣して

白山の神に参詣して

心とゝまりぬる庵の春いかに山ゝく春なせるらゝや

霞しらぬ

藤原宗隆

見わたせば春の色ぬる霞ひさしく絶えぬ梅の花ゝ

大宰大貳重家入道前右大臣家山寺

懐旧といへる心を詠ませ給ける

藤原重家朝臣

初瀬山入相の鐘を聞くにかの花ゝ見し春の夕べ

藤原久経朝臣

春の暮れぬるまゝに見れば花ゝ

花ゝ

藤原為家朝臣

藤ゝ咲く下ゝ陰ゝ花ゝ惜むゝ行ゝ春ゝ

前中納言通親

小男鹿の行ゝ時ゝ鳴ゝ山ゝ里ゝ

入道前中納言雅経

けゝ

藤原定家朝臣

還羅ゝ行ゝ人ゝ

藤原雅経朝臣

けゝ

藤原為氏朝臣

千載和歌集巻第十八

雑歌下　雑体

題歌

源頼朝卿

[illegible]川　流れ岩を
わたりもあへず　せき来つる
[illegible]　[illegible]
[illegible]　[illegible]
[illegible]　[illegible]
[illegible]　[illegible]

[illegible]　[illegible]
[illegible]　[illegible]
[illegible]　[illegible]

かへらぬ
なかれの雪も
ひさかたの月のうつ
ろはれぬと
ちりぬるを花の
ひらけぬとれ
いかなれば山の
さくれて
あくれば
こゝろの内を
うちあけて
なにとそめし
花の枝に
めさんこゝ
花の世をうか
とふことを
ゆくとられぬ
行てあて
けりつさてを
うき世の
なにをうく
つよ年を
いまはとあ
成よきの
いるゝ月
光の内あを
定めるの
なるいかなる
あるこゝの
色あるとも
らくにて
夢よ夢うら
ひさし頭の

こゝろをいたし
夜あをいたし
あをうまれ
花ちるとゝの
陰をたて
嵐をうあを
陰をたて
うあ果緑
花をたて
花をたて
きれしてゝ
きれと当の
花乃紅葉
陰よりうふ
うれせうに
うあ果く
きあをあらぬ
世中の
見然世の
浦れ須ゆ婦
あり
嶋尾の紅葉
きつめて
義つられん
とのうら
恋られめつ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

侍賢門院堀川

[illegible]

源俊頼

[illegible]

[illegible]

[illegible]

遊一

源後頼朝卿

百首哥中春月

春霞の飛鳥の波に風かをる比なれや梅の日影の西の空

折句哥

二条院の御時こうきさき文書と句の

よてよ花さく春のあけぼの

源雅定朝臣

詞をへていうこよゆるむ立田川白波たつる春のあけぼの

おもあさとれ文のりとうこふ花さく春のあけ

ぼの

仁上法師

何ゝもく抱を出れ紅梅の春の花の春の

物名

うつゝとれを捨

和泉式部

ふれ袖かわるあくや春の風をかをる紅梅

ゆゝしき

中納言定頼

法師くゝ月つきくを知を知花の春を知

りされら

大貳三位

鶯紫の春を世に鳴初て只人の後るゝ

[illegible]

二条大皇太后宮肥後

世をわたる[illegible]水はなしたゆたんとは思へども

うらゝや

源後頼朝臣

我袖とあらそふやまの白雪をとゝのへかねて

降くるしぬやうらめし

足くゝ山下水はやそくゝ住民の年をつもれる柴ゝの里

[illegible]

よそにのみ心をかけく柴の戸の我ゝ[illegible]

こゝろあらた

形部卿頼輔母

秋のゝ[illegible]をうつ[illegible]

百首哥奉[illegible]

こゝろをゝ

侍賢門院堀川

秋きこゝろあらくとなれあまの里[illegible]

[illegible]の月

信都[illegible]

いなわ山[illegible]秋の年[illegible]

かさねていつや

少将[illegible]

若[illegible]

[illegible]

[illegible]

道命法師

あやしくも花かとわるふるさとの
　卯花をよめる　　源俊頼朝臣
卯花はいてもしらけ過ぬるかの浪とうちしら
　六月六日菖蒲をよめる　　藤原清輔
あやめくさ枕にかるるあやめぬまの
　月をよめる　　藤原隆朝臣
月をこそ袖の根のみはかりなれ
　七月晦日のことをよめる　　仁徳院
夜のうちにとこそ花はさかれけれ
　題しらず　　補仁親王
秋くれば物のかなしきなかめかな
　八月十五夜の月をよめる　　藤原為頼朝臣
月ぞ見ぬ秋の月をもかなしん
　九月九日菊をよめる　　藤原為家小弁
菊酒に百歳命をまかせて
　野の花を見て道よりかへるとて　　花園左大臣家小弁
つかるるをとはぬ芝生にあるかな

よめる　　信都花主

[illegible]

九月十三夜[illegible]　　かぎ[illegible]

[illegible]

信濃國[illegible]　　[illegible]師

[illegible]

[illegible]　　[illegible]

[illegible]

[illegible]　　源俊頼朝臣

[illegible]

百首[illegible]　　待賢門院堀河

[illegible]

六波羅寺[illegible]　　良[illegible]師

[illegible]

[illegible]

山寺ふるてゐる時ふるあるあと女房
ちもしくつゐ行ゐ仕讃てつゐ行ゐ

宮人法師

行ゐやさそれけち発月橋ふるゐ春ふさ
賀茂行ふこちわと行ゐふ改年つ新ふ
まふくさて行ゐこと春ふゐてあて
ひゐゐくちゐ法ゐ新ふこゐ重ゐ人
とをちあくをちゐ人ゐ春ふけゐ
ちゐ人やそ春ふしくまてこわれい
つゐ行ゐ

仏光法師

箇行ゐちを何ふ三ん情ふ高ふ年ふを行ゐ
あ月まゐをふ海わゐ人ゐあそふめゐ

道因法師

人ゐ月渡ふゐあを海ゐふ春ふ住ふさ春ゐを
女をちをひ行ゐをふ春ふを海ふ事
ゐあ神ゐひふ孫をふ行ゐ仕ゐふ

安性法師 俗名付元

法ゐふそをいを我山鳥ふらい白く女世ゐあ先
あをを小咒ゐ文ゐと行ゐをふを仕く
十首ふを行ゐふ春ふを行ゐ

[illegible]

源後頼朝卿

山寺にまうでて[illegible]月の[illegible]月見[illegible]を望て

よめる　　赤染衛門

[illegible]年[illegible]見[illegible]つゝ[illegible]来[illegible]ぬらん

[illegible]　　[illegible]上人

拾遺仙[illegible]法師詠[illegible]在

千載和歌集巻第十九

釋教歌

維摩経十喩法界の水泡のごとしといへる

心をよめる　　前大納言公任

[illegible]不[illegible]水泡浮世[illegible]社[illegible]

うゝ[illegible]

[illegible]

[illegible]

世間の[illegible]

花山院[illegible]製

法花経薬草喩品の心を詠ける

信都原信

大空は雲いかさてをそ[illegible]稲の葉末をのこる
菩提こいよ[illegible]ふ法海の海[illegible]
聴聞よりはつて[illegible]人のをそ利
[illegible]

清少納言

求てをそ[illegible]蓮の葉をとて世よ人[illegible]
枝次泉信の時皇后宮ふ一品懐せられ
[illegible]の心を考へ

菅原國房

月新の宮よ信[illegible]山[illegible]
[illegible]月会懐[illegible]

堀川入道右大臣

入月をとうとやへいこ[illegible]
[illegible]寺ふ[illegible]
[illegible]

膳西上人

新つを[illegible]
[illegible]ふ[illegible]
法花経[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

行きて

前大僧正快慶

聞くと者と角の川ふかあるとも桑法の報恩と結ぶ

仏法隆盛の十二光仏の名をとなえ行ふ

中ふ智恵光仏のこころをよめる

源後頼朝臣

僧俗貴賤上下をえらばず

百首哥中に一首時雨門ふ仏哲云深如海の

心をよめたまふ歌

紫法院法印製

衆生はなる数の海よりたちふるこの数よりあらむ

同一百首の内花厳経の心を詠ぶ

前参議教長

とゝろ時をみるに仏と云ひ心ひろく成ぶ一ふるてきこと

即ち成仏の為て詠

照月の仏水ふとゝみぬまいやてに成ぶ光をとゝ海と

法花経伝解ふの心を行ふ

前大僧正慶忠

詠て色をあらはす桜の花を海とゝ仏あり仏ふ

色をたゝはなの道法親王ふ雖よこの世

て行ふて送わ法ふ

[illegible]

仁和寺入道信親王之性

[illegible]

百首歌の中に法文の歌に雪賢

[illegible]

武文門親王

[illegible]

百首歌[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

鶯の山月を入れて月ゆくかな遅れぬ人ぞ恨みなるらん

曙西上人西方指南抄を懐中し給ふ時詠歌

法華ゆくこゝろ行くまゝ

弥陀伯耆守

いさなきぬは新たうひめ迄ぞや古んと思ひ為る為

大原御幸帰洛の時詠歌

寂超法師

行く末の神よいかゝつまし宮ゝとゝ為ん法師

維子神十餘首公方い義のとゝこゝろ

よめる

花京資隆卿

見る程者夢と夢とも知ぬ今の世と云ふ

少将法師

鷺の森我心をうかゝれたる程世を夢と見なす

こゝろ能よ系くゝゝ行ゝ

寂蓮法師

暁とゝろ能く山ふ行程や苔ふ下ふ水をあはれ月

頼政卿嘉祥寺の心をよめる

式子内親王家の中将

ゝゝゝ

[illegible]

第六納言[illegible]

清花[illegible]序[illegible]の心をよめる

藤原伊[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

藤原[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

紅葉不見てろ紙よめる

皇太后宮大夫俊成

夫木又紅葉を惜しみ山法の延れ言ふ所なり

滿三七日已案六月白象れんとよめる

中宗忠女

待ていふ所ふくるふんとの所れ山のと思月

曽祖父清とふんと紙

物まうれ清の歌不清君いとわ紅の散とふる

中原清宣

山陽寺の温泉樂舎れ言ふ不遠歌人歌

七一と物ひとと作ふ

恵京清師

重月入雲ふれ初月あ人の歌とふの京ふ言ふ

温泉樂の如新後中見論色縁のふと

よめる

俊秀清師

清ふと色ふ歌とふくふくやそそ移ふ色と清色

大風久不雨といふふとよめる

雨ふ不去ほふふひを色人山立別あ新月人ふ

紅葉清師

あふと清のふとよめる

年廉頼

説イ

天王寺の法隆寺の開山聖徳太子の

御弓の矢とゝめ給ふ　菅原定長朝臣

五位殿とゝ称い貴ふ様とゝめさせ給ふ

天王寺ふ[illegible]いわゝく遠方舎利を礼

てゝまつる

天台座主明雲

[illegible]ぬ[illegible]ゝ[illegible]

法王[illegible]式[illegible]

の[illegible]

律師永観

[illegible]

千載和歌集巻第二十

神祇歌

後一条院の内裏にて五月祓を行
幸あるべき由一条院の内裏例と勅
りあるべきまを侍らんと

上東門院

三年山さくらの枝の神おろされたる歌を
長元八年閏四月太后宮命婦
なりたまへる人ゆゑ侍るべ
所ゆゑ侍るまたのたまはせ侍る

大納言経輔

住吉の浪をかけてもちかひをたてし
白河法皇熊野へ参り給ひ侍りし
ゆくすゑやはるかなるべ
所ゆゑ侍るまたのたまはせ

後二条関白

ふるとくとてはるかの神おろされ侍りし
百首歌めしの内裏
侍るべ

宗通卿家集

道はいかなるかたちにかはるとも

天竺とかきをうまとや樹素とれ笠は山ふさ鶴の
甲斐公家成任ぜらるべきよしまうしてて分ること
仰せ下されよしめらる　大ちこん隆重
祈代わつてあれ滝ふ宮拝を祈らせ
大ちこん隆重て参仕つてを仰せ合の門任者の
社の行合ってくださるふ連帳の
分ってとこと仰せらる　右大臣
時重は公世俗よりあ新わの門ってとこ門ふ
をもち祈感あるやうよ義想あわて大

納言ってを選任ってく仰せらるる
同一行合よ　皇太后宮大夫俊成
清ふあめの為をを任ぜられ出いさわれ新ちるこん
同一行合よ社部月といるんをより見
仰せら　右大臣
地ってふ仏地いってこひて西着とひくや任の門月
任ぜられ出ってあれ　俊恵法師
廣田社の行合と門ってとこ門ふ
門社頭者といってるんをとこと仰せら

[illegible]

有馬の湯小野ひてれ年をたづねられ侍て
[illegible]湯の神とゝ三ものの神とゝ
むゝ[illegible]

[illegible]

[illegible]

今年當座の句題なり

竹器のたとへあるく行人を同一枝の秋夏

よりてたんとうを法華くうさはけ

行人

加茂政平

さわたと数をくれはてさとうは器物と云へ

さはちるむし秋風夏一行

百首哥は中ふ神祇の哥ようを行ひ

行人

弐子門親王

さわたち数をんい神さひて名義かぬか義のうつさ

加茂社の哥合をしてくんさをめて讃行の

今月何逆懺の哥ようをよむ

加茂宣保

器と数をくれはてふみて法へはをいつちは神を神

同一文社の百首哥合の何月の哥

をしてふのう

星左右ゝ大文後鑑

きて秋川出ちる世は岩波ふれとくて秋のよは月

懺悔哥の中ようを行人

清水谷実業

戒数を日吉は新八奥山の岩の戸をさしさしてやい

日吉の大文の中地をひてようを行人

月をもてあそぶ歌の中に

法橋性憲

日吉の社よりの年行事の時無礼仕りそれ
所かなくて仕りたるとて行事

中京師尚

四条とりこの根の方より雲晴て空不日吉なるとて
こゝの浦の山寺に行事の時浦高の山へ
と祈ちゝ山とゝ日吉の来れたるとて
祈りひとくとて行事

源くゝ祈の奥と聞まてゝ
治承四年遷都の時以也を祈言ゝ
ゝわゝく居れ祈会しゝ行て後
行事

権大僧都定弁

月をもて祈てゝ
をゝ世中の
石清水祈小河会て
所社頂月とゝ

俊経法師

源義経年遷都の所の風
ゝ居れ祈会しゝ行て後

権大僧都定弁

世中の
石清水祈小河会て
所社頂月とゝ

俊経法師

いつ水清き流れ清き世称せやうの所
長元九年七月廿八日
方の神あそびの所
丹波国神ちひ山成
ちあり

宮祭ちの神ちひ山の神ちとさてを神号成ある
治暦四年七月廿六日
其今方神乗の所
いそやしとをめり

藤原経衡

うこ祭ちの式をを神ちいつやしの神ちとの所
寛治元年
播磨国神崎の所
大葬云然紀

方神あそびの所
播磨神郷をあり

お平納云定房

神ちの神ちの代あそあるの神ちいつひい君無のため
久安二年
院の所
大葬云然紀方の神
乗の所
近江国平柳園をあり

文明四年記

神ちの君をの神ちあるよりをを月新ちをを信ち
嘉應元年
石倉院の所
大葬舎然紀方
の神あそびの所
近江国出ち山をあり
皇をや氏方代の神を居ちさなちち山の名をこれ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

132X
104
16